

海外育種事情調査 (ソロモン諸島国およびフィジー共和国)

1. はじめに

林木育種センターは、太平洋共同体(以下、SPCという。)と「防風効果の高いテリハボクの育種研究」を進めています。

本年1月、SPC加盟国であるソロモン諸島国及びフィジー共和国に出張し、テリハボク等の育種事情等を調査しました。

2. ソロモン諸島国

ソロモン諸島国(以下、「ソロモン」という。)における林業は、同国の総輸出額の50%以上、国家歳入の30%以上を占める主要産業です。輸出される木材は、大半が天然林由来の原木丸太です。しかし、天然林資源の減少が深刻であり、人工林施業の推進が求められています。ソロモンの主要な造林樹種は、チーク、マホガニーやユーカリなどの早生樹です。同国では、森林の90%以上が民地であり、民有林造林が主体となるという特色があります。

一方、ソロモンでは、集落が主として島々に囲まれた内側に位置し暴風や高波から守られていること、また、国の禁伐政策によって保護されたマングローブ林が一定の防潮機能を発揮していることから、防風・防潮林造成に対する国民の関心はあまり高くないとのことでした。

テリハボクについては、1990年代には産地試験が行われていましたが、研究は中断され、現在は当時の資料が残っていないとのことでした。しかしながら、材が建材として使われ、薬用等に種子油を販売していたこともあり、今後、生計向上や気候変動適応策としての防災に寄与するテリハボク植林に対する潜在的な需要は高いと考えられます。



ソロモン森林研究省でのミーティング

3. フィジー共和国

フィジー共和国(以下、「フィジー」という。)の人工造林は、民間企業が主体で進めており、主な造林樹種はカリビアマツやスラッシュマツです。政府主導の造林は、マホガニーやサンダルウッドなどの広葉樹を中心に進められています。

フィジー森林省は、今後4年間で400万本の植林を目指すこととしており、海岸部では、防風林造成を目的としてテリハボク等の植林を行っています。

このため、同省はテリハボクをはじめとする造林樹種の試験地の設定や苗畑施設の改善に高い関心を持っており、また、これらの取組を推進する上で、森林省の研究開発部門の強化が課題とのことでした。



SPC土地資源部でのミーティング

(海外協力部 西表熱帯林育種技術園 楠城 時彦)